NPO法人 長崎史談会

長崎学レポート

第11号
2023年1月1日発行
長崎学レポート
編集委員会
〒850-0861
長崎市江戸町5-8
第5一ノ瀬中央橋ビル

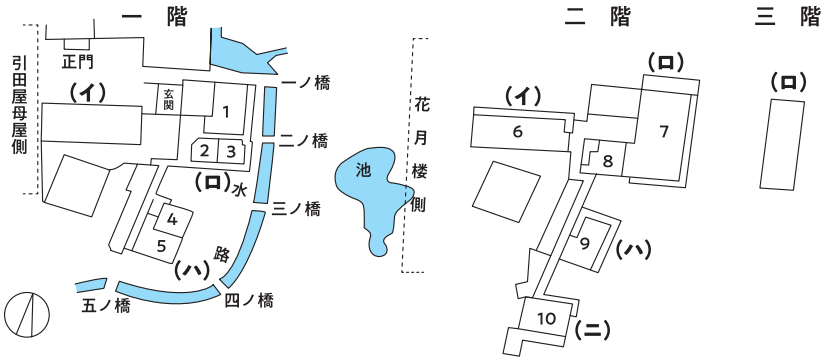
2022年度　第3回公開講座 2022年7月16日 ・ 第4回公開講座 2022年8月20日

第三回長崎学公開講座 第一部発表要旨

花月の建築（1）史跡料亭 花月

村田 明久

長崎市丸山町に残る史跡料亭 花月の建築は、丸山遊郭の遺構として今日知られている。



1桂の間　2冬の間　3山陽の間　4唐瓦の間　5春雨の間
6其扇の間　7竜の間　8竹の間　9月の間　10鶴の間

図　料亭花月の客間

その敷地はかつて広大で、西の寄合町側に引田屋遊女屋、東側の旧小島郷に花月楼が建っていた。

明治一二年（一八七九）に花月楼が焼失、明治後期に引田屋廃業、昭和に入ると土地が分割され売却された。この事態に「今にして之が対策を講ずるにあらざれば（略）歴史的料亭の跡を断つに至るべく長崎人の恥辱たらずんばあらず」と花月保存会が昭和一五年（一九四〇）に発足し料亭花月の部分を引き継いだ。

料亭花月に残る建築遺構を図に示すと、丸山町側の入口正面に（イ）の建築、さらに（ロ）の玄関から入ると、奥に（ハ）（ニ）の建築が続く。

江戸初期の遊女屋とつながる部分（イ）、江戸後期から明治の複数の料亭客間の各部分（ロ）（ハ）（ニ）から成るが、これらはかつて存在した江戸中期からの花月楼との関係が認められる。

江戸期は引田屋側から花月楼へ行くのに、一ノ橋を渡っていたのである。

（イ）の建築は、寄合町側にあった引田屋遊女屋の付属屋の一部で、二階に客間が連続し、川辺りまで伸びていた。現在も「其扇の間」として使われている。

引田屋の創業は丸山遊郭ができた寛永年間、初代当主は山口太左衛門（？～一六五七）といわれる。寛文三年（一六六三）大火の後、延宝頃に普請している。『延宝版長崎土産』に「ひけたや太左衛門、此比ふしんしてきれい也、家のわけもよろつよくなりたるよし。いよいようすくもさまの世と成へし」と新装普請なった様子の記録がある。

寛延四年（一七五一）に川向かいに土地を得て、別荘花月楼を建てたが宝暦九年（一七五九）に焼失。さらに文化年間に再建されると、その茶屋建築が人気を博し、大田南畝、頼山陽、石崎融思など多くの文人が訪れた。

（ロ）の建物は（イ）の建物に接続された三階建の高楼で、料亭の主玄関が位置する。その建築時期は花月楼より早いとも明治期だともいわれ、経過が長らく分からずにいた。

この会は個人会員と法人会員の皆様により運営されています

十八親和銀行　長崎バス　文明堂総本店　みろくや　福砂屋　松翁軒　森谷商会　小野原本店　浜屋　メモリード

幕末の長崎開港となると、諸外国人が遊郭にも訪れた。幕末期の丸山遊郭街を示す「丸山町古図」には、引田屋に山口繁左衛門（一四代）とあり、同図に（ロ）の建物は未だ出来ておらず、敷地の中を水路が流れている。

建築年がわかるのは、次の離れ（ハ）で、棟札に「于時文久二壬戌年四月二日土蔵新造主山口茂左衛門増茂」とあり文久二年（一八六二）の改修とわかる。山口繁左衛門が楼主となった嘉永五年（一八五二）から次の離れが完成した文久二年の間に（ロ）は建てられたようだ。奥の離れ（ニ）は明治一八年（一八八五）と聞いている。

興味を引くのが、既存の水路を変流して料亭建築を建設したことで、水流や地形・石組を入れた庭園デザインを試みたと読み解ける。

さらに「丸山町古図」を見ると、花月楼の庭園周りは塀で囲われていたが、これを取り除いて、花月楼・庭園と引田屋母屋側とを視覚的にも利用的にも融合させたと見られる。

この作り方から、江戸期の花月楼の建築と池を中心とした庭園建築を上手に継承して、近代黎明期らしい、新しい和風庭園建築が試みられたとわかる。

さらに注視すると、柱痕で知られた料亭の要の大広間「竜の間」のあるフロアの造りは、大部屋と同レベルで展望できる鉤の手ベランダを設ける形式で、かつての花月楼二階の造りと類似している。

かつて裏千家のお茶会に呼ばれた時に三六畳の、「竜の間」の各席と、向かい側にある芝生に傘など差し設けた茶会の席が連なり、広々とした庭園の緑がとても印象的であった。

建物を対岸にある花月楼と向き合う高さとして庭園への眺望を確保していた。

料亭花月の建築

建物・庭の配置は、（ロ）から（ハ）、さらに（ニ）と大中小の建物が角度をなしてつながり、それぞれの客間の独立性を高め、景観の変化を楽しめるようになっている。

これらの各上階の客間は一室構成で、互いの視線を邪魔にせず、各建物から花月楼の庭園への展望がそれぞれ楽しめる仕掛けになっている。（ロ）では「竜の間」、（ハ）では「月の間」、（ニ）では「鶴の間」と遠景にちなんだ室名をつけている。

それに対して下階の客間は、二室構成が基本で、どの客間からも、散歩ができる小さな庭が造られている。（ロ）では「桂の間」と「山陽の間」「冬の間」の間の中廊下から、直接二ノ橋を渡り庭園に行くルートがある。

（ハ）の下階は「唐瓦の間」「春雨の間」による構成で、小庭に出るとそれぞれ三ノ橋と鳥居、四ノ橋に出て、庭園に行くルートがある。

（ニ）は、小高い所にある平屋造で「鶴の間」の一室とし、専用庭に古風な灯籠が配置され、対岸の庭園が遠望できる。

第三回長崎学公開講座 第二部発表要旨

隠元禅師ゆかりの中国の寺院～萬福寺ほか～

原田　博二

一、隠元の師密雲と費隠

隠元禅師（以下、「隠元」と記述）は、一六二〇年、萬福寺（福建省福清市）の鑑源興寿について出家、以後、各地で修行するなかで、密雲円悟やその法嗣費隠通容に巡り会った。

密雲円悟（一五六六～一六四二）は、俗姓は蔣、江蘇省常州府宜興県に生まれ、幻有（臨済宗開祖臨済義玄から数えて二九世）について出家、後に幻有に嗣法した（臨済から数えて三〇世）。

以後、通玄寺（浙江省台州市）、金粟山広慧寺（同省桐郷市、以後、「金粟寺」と記述）、黄檗山萬福寺、阿育王山広利寺（浙江省寧波市、以後、「阿育王寺」と記述）、天童山景徳寺（同上、以後、「天童寺」と記述）などを歴住した。

費隠通容（一五九三～一六六一）は、俗姓は何、福建省福州府福清県に生まれ、一四歳の時に出家、以後、密雲について修行、一六二九年、密雲に嗣法（臨済から数えて三一世）、密雲の後を承けて萬福寺の住職になった。

一六三六年、隠元に住職を譲ると、以後、金粟寺、天童寺、福厳寺（浙江省嘉興市）、径山興聖萬壽寺（同省杭州市）などを歴住した。

天童寺大雄宝殿

二、明末清初の臨済宗

宋は、欽宗の時の一一二六年、金の侵攻により滅亡した。

欽宗の弟趙構は、江南に逃れ、翌年、南京で即位（高宗）、南宋を建国した。

しかし、その後も絶えず金の侵入に脅かされた。

そこで四代寧宗は、国家鎮護のために五山十刹の制度を設けた（日本の鎌倉五山、京都五山は、この制度を倣ったもの）。

この五山十刹というのは、インドの釈迦の五精舎に、十刹も釈迦の十塔所に倣ったものである。

五山の寺院は、第一位が径山興聖萬壽寺、第二位が霊隠山景福霊隠寺（浙江省杭州市）、第三位が南屏山浄慈寺（同上）、第四位が天童寺、第五位が阿育王寺であった。

これらの五山は、名刹中の名刹であるが、なかでも萬壽寺の三四代住職無準師範に嗣法したのが日本の東福寺（臨済宗東福寺派・聖一派）の開山円爾弁円であった。

また阿育王寺は、日本への渡来を宿願した鑑真和上が三回目の渡海を前に滞在した寺院であった。

さらに天童寺は、日本に曹洞宗を伝えた道元（日本曹洞宗開祖）が同寺の天童如浄に嗣法した寺院、道元が滞在した当時は、曹洞宗の寺院であった。

ちなみに筆者は、以前、この五山を全て訪れ調査を行った。

このように密雲と費隠は、金粟寺、阿育王寺、天童寺、福厳寺、萬壽寺といった名刹を歴住、天童派、さらには径山派と呼ばれたその一派は、浙江省の杭州府や寧波府を中心に一大勢力を築いた。

三、萬福寺と隠元

前述のように隠元は、密雲、さらには費隠について修行、一六二四年、金粟寺の住職だった密雲について大悟、一六三三年、萬福寺の住職だった費隠に嗣法した（臨済から数えて三二世）。

隠元は、一六三七年、費隠にその職を譲られ、萬福寺の住職になった。

ところで萬福寺は、唐の七八九年に開創され、当初は般若堂と呼ばれたが、唐の皇帝徳宗より「建徳禅寺」の額を下賜されたことから建徳寺と改称、さらに明の皇帝神宗より「萬福禅寺」の額を下賜されたので、萬福寺と改称した。

萬福寺は、開創以来、禅宗、さらには臨済宗の寺院として存続、明代末期、密雲、さらには費隠が住職になると臨済宗天童派に属した。

密雲は、天童派萬福寺の初代住職、費隠は、二代住職であるが、隠元は、三代住職であるが、隠元は、萬福寺を中心に活動、同寺を拠点に臨済宗黄檗派（隠元黄檗派）を確立した。

なお臨済宗黄檗派は、現在、中国と日本、さらには台湾などで活動しているが、黄檗宗と呼ばれるのは日本だけ、ほかは全て臨済宗黄檗派（隠元黄檗派）である。尤も日本の黄檗宗も、江戸時代以降、明治九年（一八七六）までは臨済宗黄檗派と呼ばれた。

龍泉寺大雄宝殿

萬福寺の住職に七年間在職した隠元は、法弟亘信行弥にその職を譲ると、一六四四年から一年間、福厳寺の、一六四五年から一年間、龍泉寺（福建省長楽市）の住職を務めた。

福厳寺は、南朝梁の五〇三年に開かれ、八七六年、唐の皇帝僖宗より「千乗禅院」の額を下賜されたが、北宋の一〇〇八年、福厳寺と改称した。

龍泉寺は、梁の五五四年に開かれ、以後、福建省六大古刹の一つに数えられた。

唐の皇帝懿宗より「龍泉禅寺」の額を下賜されている。

この龍泉寺は、開創以来、名立たる僧が住職になっているが、なかでも『百丈清規』をつくった百丈懐海は、六祖慧能の法系で、馬祖道一の法嗣であった。

そして百丈の法嗣が黄檗希運、その法嗣が臨済宗を開いた臨済義玄であった。

このように福厳寺も龍泉寺も名刹の誉れ高く、隠元が在職するにふさわしい寺院であった。

隠元は、一六四六年、萬福寺の住職に再住したが、一六五四年五月には法嗣慧門如沛にその職を譲り、長崎への渡来に備えた。

第四回長崎学公開講座 第二部発表要旨

古美術商「池正」

大田　由紀

初代池島正造は、弘化二年（一八四五）生まれ、長崎市麹屋町に「池正」を創業、書画や茶道具などの鑑定に優れ、また商才もあり、長崎随一の古美術商といわれた。

明治二四年（一八九一）四月二七日ロシア皇太子ニコライがロシア艦隊で長崎に入港。皇太子は、五月三日の公式上陸を前にお忍びで上陸、私服の警官が護衛に当たり、その行動は逐一『露国皇太子来航に関する書類』（長崎歴史文化博物館収蔵）に記録されている。

これによると二八日から三日間、江崎べっ甲店など市中の店で計一一五四円五三銭もの買物をしている。

そのうち「池正」での購入額七五〇円が最も高額である。蒔絵象牙細工の大額、蒔絵の短刀、脇差、龍の置物、牡丹蒔絵文箱など一二点をロシアに持ち帰っている。

長崎では当時、大徳寺の焼餅四個が四銭五厘だった。現在は四個で七〇〇円、これを基に計算すると池正での買物は、およそ一二〇〇万円弱であったと推測できる。

初代正造は明治四〇年（一九〇七）死去、息子の徳次郎が二代目正造を継いだ。

芥川龍之介は大正一一年（一九二二）長崎を訪れたとき、洋画家の小穴隆一宛の手紙に「蓬平は長崎中人をつかはし隈なく捜し候へもその名を知り居りしは池庄（ママ）と申す骨董屋の主人一人のみ」と記している。蓬平とは江戸期の画人、佐竹蓬平のことで、長崎に来て南宗画を究めたといわれる。二代目も博識の人であった。

参考文献『芥川龍之介全集第十九巻』岩波書店（一九九七年）

英語の看板が掛る店頭（池島家蔵）

長崎くんち研究2
龍踊の恩人、平山蘆江

大田　由紀

大衆小説作家として活躍した平山蘆江は神戸市に生まれたが、幼少の頃、長崎市本籠町（現籠町）平山酒店の養子となり、長崎で育った。

養祖父の三次郎は、龍踊の龍頭を遣った力自慢であった。幕末、龍踊興行を計画し、一行を率いて江戸に上ったが、深川の小屋が火災で延焼し、頓挫したこともある。

昭和一八年（一九四三）満州での講演旅行の帰途、久しぶりに帰郷した蘆江は、籠町が龍踊の囃子道具一式を軍へ献納するということを耳にして驚いた。すぐに町の世話役白水茂七に会い、その思い違いを説いた。

「やがて平和になったとき、第一番に提唱されるものは隣接相和することでしょう。日中和親のために、尤も縁の深い龍踊がどれほど役に立つか知れません。滅多に得られない銅鑼やバッチや打鉦をむざむざと鋳つぶしたって、何発のたまができましょう。」

白水茂七は納得し、即座に献納を取りやめた。

それから二年で敗戦、昭和二三年（一九四八）の長崎くんちに本籠町は戦後初の龍踊を披露し、長崎っ子を沸かせた。

蘆江もまた白水茂七の決断に感激し、裏表合わせると一〇メートル以上にも及ぶ絵巻を折本に装丁して茂七に贈った。

それには龍踊の由来とともに、傘鉾、龍踊、囃子、唐人行列、媽祖行列が蘆江の筆で活き活きと描かれている。

平山蘆江が描いた本籠町の龍踊行列（部分）白水剛氏蔵

参考文献・平山蘆江「蛇おどり」『長崎手帖』三三（一九六三年）

法人会員紹介
株式会社メモリード

本社　長崎市稲佐町二番二号

メモリード昭和五六年（一九八一）建設の本社ビル

弊社は、昭和四四年（一九六九）五月、北九州市出身の創業者・吉田茂視が、同志六人と共に長崎の地を踏み、同年七月長崎市中町に「株式会社長崎冠婚葬祭互助センター」を創業したことが始まりです。

昭和五六年（一九八一）には稲佐町に本社ビル（現在の稲佐橋メモリードホール）を建設し、「メモリアルをリードする」という想いを込めて、会社名を現在の「株式会社メモリード」へ改称しました。

長崎市で産声をあげたメモリードは、その後、諫早、大村、佐世保、伊万里、佐賀と営業エリアを拡大し、昭和六〇年（一九八五）には東京に、二年後の昭和六二年（一九八七）には群馬、そして平成元年（一九八九）には宮崎にも進出しました。

現在では、メモリードグループとして、長崎、佐賀、福岡、宮崎、群馬、埼玉、東京、沖縄の一都七県で事業を展開しています。

令和元年（二〇一九）に創業五〇周年を迎えたメモリードは、現在県内で斎場二四ヶ所、ホテル・結婚式場八ヶ所で、お客様の人生のセレモニーをお手伝いしています。

これからも「ありがとうをもっと届けたい。ありがとうにもっと応えたい。」という創業の原点を忘れず、人生のセレモニーに寄り添ってまいります。

隈研吾設計のガーデンテラス
長崎ホテル＆リゾート